

所長挨拶

図書館と私の次なる夢

よこやま ちあき
横山 千晶

(日吉メディアセンター所長)



2017年の10月から日吉メディアセンターの所長に就任することになった。といっても実は、再び日吉メディアセンター所長としてご迷惑をかけに戻ってきた、ということになる。

前回所長を務めさせていただいた際の本誌の所長あいさつとして、私は「図書館と私のささやかな夢」というエッセイを載せている。(2014年21号) 他の所長の皆様も、義塾の中での図書館と所長としての責任について抱負を述べられている中で、一人だけ、個人的な夢を語るなどという自己中心的なエッセイに、我ながら雑誌を手にして赤面したものだが、今回こそは、他から浮かないように、しっかりとした挨拶を…と思いながら、やはり頭の中に浮かぶのは個人のささやかな夢なのである。

1年間の研究休暇の間に日吉メディアセンターの方々にも大いにお世話になって、海外の図書館生活を堪能する機会に恵まれた。夏の間滞在したケンブリッジでは、文字通り、図書館で始まり図書館で終わる毎日を過ごした。またロンドンのメトロポリタン・アーカイブズ(LMA)では、資料を閲覧するのみならず、ワークショップにも参加して、紙媒体の資料を残すことの重要性と先人の努力の一端に触れることができた。私が参加したワークショップのひとつは性的マイノリティの人々の記憶についてのもだったが、迫害を受けながらも、いかにして当事者たちが、片端から捨てられていく資料をひそかに収集し保存し続けたのか。それによって、人々の記憶がどのように後世に伝えられていったのかの足跡をたどることができた。LMAは資料の保管所であるのみならず、マイノリティの人々をつなぎ、サポートする場所であり続けている。その理由は、この場所が資料を通じて、時と場所を超えた人々のつながりを可能にしてきたからに他ならない。ホワイトチャペル・ギャラリーの資料室は、ガラス張りの閲覧室のすぐ向こうがそのままギャラリーの展示

室なので、鑑賞者の息遣いを感じることができる。そして、研究休暇中にお世話になった労働者大学(Working Men's College)の図書館は、今や私の居場所のひとつである。大学が休みの時もライブラリアンのWitold Szczyglowski氏は図書館の扉を開けて、海外からの闖入者のために机を用意して待っていてくださる。新しい資料が見つかったら、メールで送ってくれるのも氏である。

1年の研究休暇は、私に図書館の役割について、あまりに多くのことを教えてくれた。そんなこともあって、この度研究休暇をとられる文学部の斎藤太郎所長の代わりに再び日吉メディアセンターの所長職のお話が来た時に、つい引き受けてしまったのである。というか、引き受けざるを得なかった。

研究休暇の間に日吉の図書館も様変わりしていた。より多くの資料を学生が閲覧できるようになり、学生を受け入れるスペースが拡大し、種々の催しが開催されている。他のメディアセンター同様、図書館と学生をつなぐピアメンターや図書館フレンズも活躍している。そしてコンサートの開催のほか、2017年の秋には日吉でも初のビブリオバトルが開催された。2014年の所長就任時に「ささやかな夢」と思っていたものがどんどん果たされている。

情報のオンライン化が速やかに進みつつも、やはり五感を通じた智見は絶対に忘れない。本という「知識」を手にしてページをめくる質感、ある一冊の本をめぐる友人たちと熱く語り合うその時間、貴重な資料を目で見ると触ることのできる幸甚。それらを提供できるのは、図書館というこの場所と空間だ。

前回は書いたことだが、慶應の学生時代、なんといっても忘れられないのは、図書館で過ごしたあの時間だった。同じ思いを次世代と分かち合うために、次はどんな夢を実現していこうか。

ということで、今回の所長あいさつも大いに浮いてしまいそうな予感である。